

はじめに Preface

この教科書は、留学生が実生活のさまざまな場面に主体的に参加するとともに、場面に適したインターアクションができるようになることを目的に作成したものです。「インターアクションのための日本語教育」(pp. iv～vi 参照)を理念として、著者が短期留学生を対象に実践した授業内容を踏まえて作成されています。

本書の主な特長は次の3つです。

1. インターアクション能力を身につけるための4つのパート

本書では、次の3つの能力を合わせたものをインターアクション能力と定義しています。まず、場面に必要な言語形式(語彙、文法、発音など)を正確に使うための「言語能力」、次に、言語を、いつ、誰と、どんな場面で、どのように使うかなどを考え、適切に使うための「社会言語能力」、さらに、場面や行動が社会でどのような意味を持つかを理解し、適切に行動するための「社会文化能力」です。

このインターアクション能力を身につけるために、各課を「かんがえよう」「じゅんびしよう」「さあ、ほんばん!」「生活の中でつかおう」の4つのパートに分けて構成しています。

2. 実際の場面のインターアクションを経験する教室活動

実生活で場面に適したインターアクションを行うにあたって、学習者が教室内で実際の場面のインターアクションを経験し、自分自身のインターアクションについて内省を行うことが望まれます。そのため、日本人とインターアクションを行う実際の場面もしくは実際に近い場面を設定し、教室の中と外をつなぐ活動を取り入れています。

3. 学習者に身近な場面の設定

留学生が主体的に場面に参加するために、日本の留学生活に必要な「日本語で自己紹介をする」「メールで連絡をする」「活動やイベントを見学する」などの10の場面を取り上げています。

なお、本書は初級後半から中級の学生を対象につくられていますが、言語表現の使い方に関して、自分なりに考えるプロセスを重視しています。本書で例示されている表現や会話は例の1つであり、学習者の性別、日本語の学習歴、学習目的などに合わせて、より自分らしい使い方を考えることを期待しています。そのため、教師には、学習者と一緒に考え、時に気づきを促すサポーターのような役割を担うことが求められます。

本書で学ぶことを通して、学習者が自ら教室の中と外を結びつけ、日本の社会や人と積極的に関わりを持ち、自信を持ってインターアクションができるようになることを願っています。

本書の作成にあたり、たくさんの方にご協力をいただきました。教材作成のプロジェクトに携わってくださった先生方、授業で試用版を使ってくださった先生方、留学生のみなさん、編集の方に心からお礼を申し上げます。

2013年12月
著者一同